

ARTICLE

小さな図書館が拓く新しい社会教育モデル 地域学習資源を記録・共有・活用する

長野大学企業情報学部教授 前川道博

1. 知識循環型生涯学習へのチェンジに向けて

社会のデジタル化が進展し、社会教育も大きくチェンジすべきターニングポイントに立っている。しかし図書館、博物館、公民館、教育委員会等、社会教育を担う立場の職場にいと、今、社会全体が不可避免的に大きく変容しつつある過程の社会の構造的変化が見えにくい。従来からのやり方・価値観を変えられない「見えざる壁」が立ちだかっている。

筆者は拙論「これからの社会教育…知識循環型生涯学習へのチェンジ」(『社会教育』2023年11月号)で、デジタルなメディア環境をプラットフォームとする生涯学習モデルへの転換とそ

の実践ケースを報告した。本稿においては、どうすればチェンジできるか、チェンジできない「見えざる壁」は何かを具体的実践に関わる知見から課題提起を行いたい。

2. 変わらない図書館、変わる図書館

社会のデジタル化により図書館等の社会教育施設がその対応を図っていく必要があることはことさらに言うまでもない。文部科学省はデジタル化の社会変化に対応し「これからの図書館像」(発表は2009年以前)を示している¹⁾。

その主な論点は次の2点である。
・課題解決支援・情報提供機能の充実
・電子情報の利用によるハイブリッド図書館の整備



前川 道博
(まえかわ みちひろ)
長野大学企業情報学部教授。専門はメディア環境学。1997年から市民参加型サービスPopCorn/PushCornを開発し、社会教育サ

イト、生涯学習サイトの構築を支援する。2008年から長野県デジタルアーカイブ推進事業『信州デジくら』に指導的に関わる。2018年から地域デジタルコモンズプロジェクトを始め現在に至る。デジタルアーカイブ学会理事、同学会地域アーカイブ部会長を務める。

Website : <https://mmdb.net/maekawa/>

さりげないビジョンながら、それぞれの事項は詳細化されている。それぞれはもつともなことながら、あれもこれも変えなければならぬ。すべての事項が「○○しなければならぬ」である。図書館の実情を踏まえると、とてもではないが、出来ないことづくしではないかとの疑問が先に立つ。それから15年経過したにもかかわらず、である。

人員が少ない。予算が少ない。現実には予算は縮小される傾向にあり、正規職員は少なく、非正規雇用の職員で業務を補っているのが現実である。指定管理者により運営している図書館もある。こうした状況は従来型のルーチン業務から一歩踏み出す取り組みが妨げられる要因にもなっている。何事も

特別企画：社会教育の未来を語る

～社会教育にイノベーションを起こそう！～

前例主義でよかったこれまでの時代と異なり、デジタル化の波が押し寄せている状況下においては、その対応を先導する才覚と決断が何よりも求められる。

全国の都道府県・市区町村においては中期総合計画、生涯学習基本計画等が策定され、社会教育施策が実施されている。政策指針上やむを得ないとは言え、総じて例外なく施策は総花的、建前論的となり、来たるべき生涯学習社会の実現に向けた第一歩が現実には踏み出せなくなっていると推察される。一例を挙げると、千葉県船橋市の「生涯学習基本構想・推進計画」においては、「デジタル化社会への対応として」「時間や場所にとらわれず、好きな時間に好きな場所で学習できるよう、インターネットを利用した学習の提供を行い、『オンラインによる学び』と『対面による学び』を組み合わせる等、より高い学習効果を得るための実施方法を検討し、提供」と指針を示している[2]。理念的指針とも言えるその具体的実現形を是非とも知りたい。具体的に施策の指針をどう具体化・実装するかはどの自治体においても、また図書館・博物館等の社会教育施設においても実現

が問われる課題である。

3. 小さな図書館の小さな踏み出し『下諏訪町デジタルアルバム』

本稿では、長野県下諏訪町立図書館が始めた『みんなで作る下諏訪町デジタルアルバム』（以下『下諏訪町デジタルアルバム』）図1(<https://d-commons.net/shimosuwa>)を紹介したい[3]。おそらくは全国どの公共図書館においても、またどの社会教育施設においても実践的踏み出しが可能なモデルケースである。

下諏訪町は、諏訪湖に面した人口2万人弱の小さな町である。諏訪大社、



図1 『みんなで作る下諏訪町デジタルアルバム』

御柱祭が全国的に有名である。豊かな自然に恵まれ、歴史も古い。製造業も盛んである。

下諏訪町立図書館は町の中心に位置し、下諏訪町役場、下諏訪総合文化センターとも隣接をしている(図2)。図書館の向かいには公園もあり、町民にとってもアクセスがしやすい憩いの場ともなっている。



図2 下諏訪町立図書館

『下諏訪町デジタルアルバム』は、「町民参加で学びあい成果を記録・共有・活用する社会教育」が実現できる小さな実践モデルである。踏み出しは

たとえ小さなものであっても、その方向が合目的、効果的なものであれば大きく変革させる推進の基盤にもなりうる。小さく作り大きく育てる。デジタルアーカイブサイト構築や生涯学習での活用は、当事者にとってはその理解・学習が必要であり、実際に構築・運用を行うことが職員にとってはリスクリングとなる。地域学習資料をデジタルアーカイブ化する事業が多額の予算立てにより業者に委託するケースが後を絶たない。勢い業者主導となり、本来、社会教育・生涯学習をどう社会の変化、学習者ニーズに対応させていくかは犠牲になりやすい。

下諏訪町立図書館は長野県の助成金を利用し、2017年度(平成29年度)から3年間にわたり「地域資料保存伝承事業」を実施した。廃業する地元の写真館から寄贈を受けた約1,500点の古い写真の保全活用がその事業のねらいである。2年間かけて写真のデジタル化に取り組み、それぞれの写真を調査して全写真のメタデータを作成した。最終年度となる2019年度(令和元年度)はその総まとめとしてデジタル化した写真のインターネットへの公開を行

った。

通常であれば、デジタルアーカイブ業者にデジタルアーカイブサイトの構築を委託するところであるが、同図書館の場合には、将来、町民がみんなデジタルアーカイブをつくる参加型のデジタルアーカイブサイトの構築とその持続的運営を計画し、私たちの長野大学がそのサイト構築の委託を受けた。

大学がサイト構築の委託を受けたのには背景がある。長野大学で私がデジタルアーキビスト養成講座を企画し開催した。この講座では極めて平易なツールを用いて古い地方新聞から面白い記事をピックアップしそれをアーカイブサイトに投稿する形で実習を行った。スマートフォンで記事を撮影しアーカイブサイトにその場で即座に投稿できる。この講座を受講した当時の図書館長さんが、これだけ簡単に使えるツールであれば図書館職員でも使えて、職員がサイト運営できると見込んだのである。加えて低額のランニングコストでの持続的運用が可能であることが見通せている。

図書館では、デジタルアーカイブ事業を発展的に継続できるよう、町民が

参加してみんなでデジタルアーカイブを継続的に運営していく社会教育事業として同サイト運営を構想した。サイト構築時点で古い写真のデジタル化はほぼ完了しており、事業ビジョンと生涯学習支援サービスとしての機能を私(研究者)と学生、開発者と職員とが意見交換を行い、町民参加型のデジタルアーカイブ事業とすること、永続的に地域学習資料を収集・蓄積し、地元をよく知ることのできるデジタルアーカイブとすること、サービスを誰もが平易にできるものとすることなどをシステム要件として整理した(図3)。

このサイトは、下諏訪町民の誰もが参加できる生涯学習プラットフォームである。下諏訪町民に限らず、下諏訪町に関心や関わりのある方など町外の有志もユーザ登録して参加することができる。生涯学習者である町民それぞ



図3 下諏訪町立図書館・開発ミーティング

特別企画：社会教育の未来を語る
～社会教育にイノベーションを起こそう！～

これはサイトにユーザ登録しマイサイト（個人のポートフォリオサイト）を開設し永続的に運営できる。10年でも20年でも自身の学習成果を蓄積しつつ、外部に公開することができる。

生涯学習のアウトカム（成果物）は日々新たに生まれている。それらもまた地域学習資料となる。バードウォッチングが趣味で野鳥の写真を撮り続けている方、写真撮影やビデオ撮影が趣味で地域の自然や地域のイベント等を撮り続けている方、学校で児童生徒を地域学習にいざなっている方、日頃からクラフトを制作し展示会で発表を生きがいに行っている方、地域の歴史を研究している方、地元の食材を活かしたレシピ開発をしている方、などなど。言うまでもなくこれらの活動はいずれも町民それぞれの「生涯学習活動」である。

4. 下諏訪町の生涯学習活動への展開 (1) 下諏訪町立図書館の活動と『下諏訪デジタルアルバム』

『下諏訪町デジタルアルバム』は2020年3月の開設から早くも約5年が経過し、2,000件を超える記事数になり運用が続いている。それぞれの

町民の生涯学習を記録し共有する場（コミュニティ）となっている。

同サイトは以下のカテゴリに投稿記事が分類されている（図4）。

カテゴリⅡ「諏訪大社一神社・仏閣・史跡・文化・町並み・航空写真・諏訪湖・漁業・温泉・観光・食・自然・学校・教育関係・スポーツ・工業・機械・電気・産業・製糸・防災・災害・資料・文書・御柱祭」



図4 カテゴリ「スポーツ」のインデックス

地元の地域、生涯学習の分野を分類すると、それらがクロスしたカテゴリになる。「諏訪大社」「諏訪湖」「御柱祭」など下諏訪町ならではの独自のカテゴリ

も設けている。

図5は昭和初期、凍結した諏訪湖でスケートを楽しむ子どもたちの情景である。子どもたちは下駄スケートを履き、普段着の着物でスケートを楽しんでいる。冬、天然のスケート場と化した諏訪湖の氷上が子どもたちにとって最高の遊び場であった様子が時代を超え、生き生きと伝わってくる。

昭和初期、諏訪湖ではスケートだけでなく、アイスホッケー、さらにはカーリングまで行われていたこともこれらの写真からわかってきた。

『下諏訪町デジタルアルバム』にはそれ以外にもさまざまな写真が投稿されている。ニココウネコノメ、トキワ



図5 「下駄スケートをする子どもたち」



図6 『下諏訪昔瓦版』の実例

ハゼなどの多様な植物、ヤマセミ、オオシなどの野鳥、また、製糸業で栄えた地域の記録となる製糸場の希少な写真群などが掲載されている。

アーカイブ記事が充実するほどにその地域情報源としての価値を増大させている。

同図書館では、『下諏訪町デジタルアルバム』を社会教育プラットフォームとし、次のような取り組みを進めている^[4]。

- ・写真の収集とデジタル化
- ・ミニ写真展の開催（図書館内）
- ・下諏訪昔瓦版の作成、配布（図6）
- ・デジタルアルバム講習会
- ・ボランティアの募集と育成

（2）下諏訪みらい塾とデジタルアーカイブ班の活動

下諏訪町の社会教育の施策は多岐にわたるが、その中で「下諏訪みらい塾」が2021年度（令和3年度）『下諏訪町デジタルアルバム』と並行する形でスタートした。「住民主体で地域や生活の課題を自由に話し合う場を作りたい」という思いを実現する地域づくり活動である。下諏訪町の社会教育・生涯学習は町の教育委員会の教育子ども課生涯学習係が所管している。図書館に隣接する総合文化センターが拠点である。

2023年度の下諏訪みらい塾では、「子ども若者の意識調査」、「デジタルアーカイブの活用によるわくわくするまち歩き」、「町のなかに本屋さんがある」、「移住・空き家を考えたい」の4つのテーマごとにグループ活動が進められた。デジタルアーカイブ班はそのグループの一つである。主メンバーに図書館のデジタルアルバム活動を職員と協働で進める図書館ボランティアの町民有志も関わり活動している^[5]。

具体的には以下の活動を進めている。

・デジタルアルバムの活用による「わくわくするまち歩き」（図7）

ウォークラブルなまちづくりが進んでいる

観光協会のHPのまちあるき基本コース、モデルコース、また博物館発行のリーフレット「史跡巡りMAP」等は、観光客向けに大変分かりやすく工夫されている。また、「まちあるきアプリ」等のデジタル化も取り入れて地図上で自分の場所がわかるようになっている。

「三角八丁」「星ヶ塔遺跡ツアー」「神仏プロジェクト」等町の遺跡や史跡に興味を持つ取り組みが充実してきている。

多くの観光客は、秋宮、春宮周辺や諏訪湖の散策が中心となっている。リピーターはどれくらいいるのだろうか。

「上田城VR」「上社神宮寺AR」「まちあるきマップのアプリ」「AR諏訪花火」等々DXが進んでいる。

わくわくするまちあるきを実現するために

さらに

興味のあるテーマでウォークラリーを楽しむながらまちあるきをするれば、まちの魅力を再発見できるのではないかな。

「下諏訪町誌～民俗編～」や「すわのでんせつ」に掲載されている伝説や昔話の聖地を巡ること子どもたちも地域の歴史や文化に興味をもつのではないかな。

「みんなでつくる 下諏訪町デジタルアルバム」で地域資料のアーカイブ化を充実させて、画像だけでなく動画や文書にもアクセスできるようにすれば、ウォークラリーにも活用できるのではないかな。

言うまでもなく、『下諏訪町デジタルアルバム』を活かし、またそこから発展したスピノフ的活動である。

・小中学校での活用に向けた紹介

・20歳を祝う会に合わせたパネル展示（以下は今後実施予定）

・なつかしい下諏訪町の風景を見て語り合おう（高齢者施設等訪問）

・『下諏訪町デジタルアルバム』にアクセスするための案内板へのQRコード添付

・「下諏訪町デジタルアルバム」にアクセスするための案内板へのQRコード添付

図7 「わくわくするまち歩き」（「下諏訪みらい塾報告書」から）

5. 学びあい成果を記録・共有・公開する生涯学習モデル

サイトタイトル『みんなでつくる下諏訪町デジタルアルバム』は、文字通り、それぞれの学習者でもある町民がそれぞれの多様な生涯学習活動（≒趣味活動）を「地域学習資源の記録・共有・活用」という共通項のもと、学習への思いや関心なども異なるそれぞれの学習者Ⅱ町民を包摂し、なおかつ社会教育事業としては極めてシンプルであるが故に図書館職員も過重負担になることなく、町民も楽しみながらその生涯学習活動の場を広げていくことができる。

町民それぞれは自分の生涯学習の成果をマイサイトにアウトプットし蓄積し続けていくことができる。長期に渡り自分の学習成果を残していくことができる。一過性、即時性の高いSNSとは異なり、学習成果の蓄積が地域学習資料として共有できるデジタルアーカイブとなる。学習者にとってはそれが自分自身の学習ポートフォリオとなる。

下諏訪みらい塾の生涯学習活動が『下諏訪町デジタルアルバム』を利用して

いることも注目すべき点である。本来、町民が主体の生涯学習活動であれば、場が重なったり、活動を棲み分けることは自然な発展形である。博物館・資料館（町立、私立を問わず）、公文書管理、学校教育等との連携に向けても可能性が開かれていくことが期待される。デジタル化により公共文化施設等の横断的な実現が期待されるMLA連携（Museum「博物館」、Library「図書館」、Archives「文書館」、MALUI連携（University「大学」、Industry「産業界」）は『下諏訪町デジタルアルバム』のようない開かれた参加型の包摂的サービスによって無理なく実現できていくであろう。

『下諏訪町デジタルアルバム』の運営をサポートするために開発したクラウドサービスd-commons.netは、d-commonsプロジェクト^[6]により機能的汎用性を高め、社会教育等の課題解決を平易に低額で支援できるメディア環境として提供している^{[7][8]}。

従来からのやり方・価値観という「見えざる壁」を超え、社会教育が地域学習資源を記録・共有・活用する新たな教育形態に発展していくことを期待し

たい。社会教育のDX（Digital Transformation）化も自ずとその先に開けていくと思われる。

■参考情報

- [1] 文部科学省「これからの図書館像」（記事登録は2009年以前）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/gyron/05080301/001/002.htm
- [2] 千葉県船橋市「第三次船橋市生涯学習基本構想・推進計画（ふなばし一歩星プラン）」、2022年
<https://www.city.funabashi.lg.jp/shisei/keikaku/003/p102093.html>
- [3] 生涯学習サイト『みんなでつくる下諏訪町デジタルアルバム』、2020年3月開設
<https://d-commons.net/shimosuwa/>
- [4] フシミヤ「下諏訪町デジタルアルバムのできるまで、それから」（『下諏訪町デジタルアルバム』掲載）
<https://d-commons.net/shimosuwa/?c=&p=130091>
- [5] 前川道博「分散型デジタル commons の汎用モデル開発：下諏訪町地域アーカイブの構築を通して」、デジタルアーカイブ学会誌、2020年4巻2号、pp.85-88。
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jisda/4/2/4_85/article-char/ja/
- [6] 前川道博「地域デジタル commons が拓く地域づくり／地域学習の包摂的融合―d-commons.netによる主体的／協働学習の実践を通して―」、日本教育情報学会第39回年会、2023年8月
<https://d-commons.net/uedagaku?c=&p=125016>
- [7] d-commons.netは、商用サービス「ド commons」としても提供されている。
<https://support.d-commons.net/>